

## 「方言認知地図」プログラムと統計処理地図

The "Perceptual Dialect Maps" Program and Statistical Maps

ダニエル・ロング

Daniel Long

大阪樟蔭女子大学

577 東大阪市菱屋西 4-2-26

dlong@joho.osaka-shoin.ac.jp

Osaka Shoin Women's College

4-2-26 Hishiyaniishi, Higashi-Osaka 577

キーワード：言語変異、言語意識、言語の社会心理学

keywords: language variation, language attitudes, social psychology of language

あらまし：「方言認知地図」とは、一般話者（方言に関する専門的な知識のない人）が、ある言語変種（「関西弁」や「標準語」など）の使用領域をどう意識しているかを地図上で表わしたものである。私の研究は、PDQという自作のプログラムを利用して、多数の話者から収集された方言認知地図を数量化し、全体の傾向を地図化していることが特徴である。

本論では、まず方言認知地図の方法を概要する。次に、インフォーマント集団の出身地による「標準語」の認知領域の差異を分析する。この分析には、改訂版のプログラムで可能になった統計処理を利用し、（2つの集団との有意差を示す）プロポーション検定の地図、平均値の地図、偏差値の地図、標準偏差の地図などを検討する。

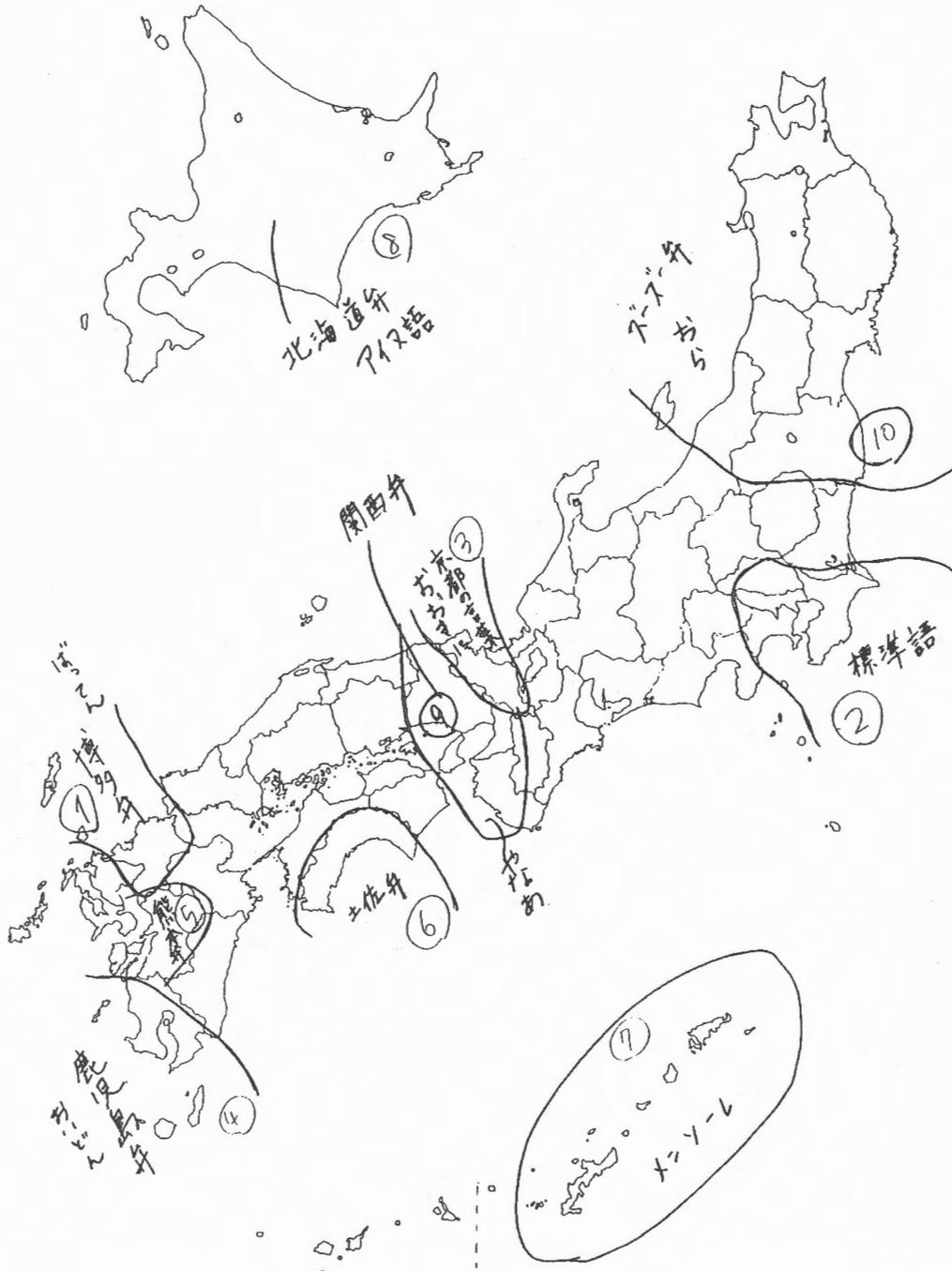
「感じのいいことば」の認知領域を、いままで使っていたパーセントの地図で表示すると、地域差の傾向が非常に弱くはつきりしない。しかし、地図の値を偏差値に換算すると、8つのインフォーマント集団のそれぞれの独特の言語意識が明確に読み取れるのである。

Summary: Perceptual dialect maps represent in cartographic format those areas perceived by non-linguists as using a certain language

variety ("Kansai Dialect", "Standard Japanese", etc.). In previous research, I examined those areas perceived as being "Standard Japanese"-speaking, focusing on the regional differences (according to the home regions of the informants) in these perceptions. In this paper, I utilize the new functions of the Perceptual Dialect Quantification (PDQ) software to show the geographical patterns not simply of percentages, but of the results of statistical procedures as well, in particular proportion tests maps (to test the significance of the difference in two percentages), mean score maps, standardized score maps and standard deviation maps.

- 1 方言認知地図の方法
- 2 「標準語」の領域
  2. 1 パーセントの地図
  2. 2 プロポーション検定の地図
  2. 3 平均値の地図
  2. 4 偏差値の地図
  2. 5 標準偏差の地図
- 3 「感じのいいことば」の領域
  3. 1 パーセントの地図
  3. 2 平均値の地図
  3. 3 偏差値の地図
  3. 4 標準偏差の地図
- 4 「標準語」と「感じのいいことば」の比較
- 5 これからの研究（インターネット版）

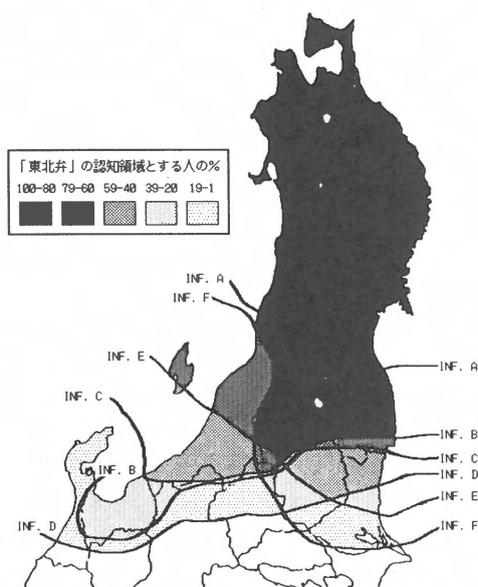
図1 インフォーマットによる手書き地図



- この裏側の地図で、使っていることばが違うと思うところを線で区切ってください。
- それぞれの地域のことばは普通何と呼ばれているか（そのことばの呼び名）を地図の中に記入して下さい。
- あなたはそれぞれの地域のことばを聞いた時にどう感じますか？最も「感じのいい」こと

- ばを1として、「感じのいい」順に番号をつけてください。
- それぞれの地域のことばの特徴は何だと思えますか？1つだけでかまいませんので、地図の中に特徴的なことば・言い方などを書いてください。

図2 手書き地図の認知領域の集計



ここで、方言認知地図の概要を説明する。インフォーマントが描いた、各方言の領域をデジタルで座標番号に換算し、テキストファイルとして保存する(図1)。次に、地図の座標点(ドット)ごとに、それぞれの座標点がインフォーマントの何パーセントの認知領域に含まれているかを算出し、パーセントの段階別の合成地図を作成する(図2)。

これまでの研究では、関東、愛知、岐阜、金沢、関西、広島、福岡、鹿児島等の8つの地方の出身者計811人を対象に調査し、合計5517の言語変種の認知地図を収集し、そのデータを数値化した。その結果、8つのインフォーマント集団の「標準語」地図(図3~10)には、①関東を指す、②北海道を指す、③地元の方をさける、の3つの傾向が共通して見られた。

2つの地図を見比べて、それぞれの認知領域には、多少の差異があることに気づくが、こうした違いは統計学的に有意差かどうかを明らかにするプロポーシオン検定が使われる。例えば、関西と福岡との間に(統計学的な)有意差のある地域が図11で明らかになっている。

しかし、地図のあらゆる組み合わせを2つずつで比較することには限界がある。そこで、8つの地方全部の平均をとり、「平均値の地図」(図12)を作成した。これで全体の傾向を把握することができる。

次は、それぞれの地図(図3~10)を、この平

均値の地図(図12)と比べてみる。そのためには、各地図の値を偏差値に換算し、それを地図化している。

先ほどの関西インフォーマントによる「標準語」のパーセント地図(図7)を見たとき、関西地方の値が北海道よりも高く見えたが、これだけでは見えてこないものがある。偏差値の地図(図13)を見ると、他の集団に比べて関西のインフォーマントは標準語領域としての北海道を非常に強く意識しており、そして東京は逆に他の集団に比べ、標準語の使用領域としての意識が低いことが分る。

さらに、8つの集団で意見がよく一致する地域と一致しない地域を示すため、標準偏差を算出し、それを地図化した(図14)。

次に、「感じのいい」ことばの領域をインフォーマントにランキングしてもらった。ここでは、第1位とされた領域を、「標準語」や「関西弁」などの言語変種と同じに扱い、その領域を地図化した。まず、8枚のパーセントを示した地図(図15~29の奇数)では、3つの傾向が見られる。

「感じのいい」ことばが使われる領域としてあげられる地域は、傾向の強い順番で、①関西、②関東、③地元の3つである。これは8つの地図の数値の平均値を示した図31で明確になっている。

ただのパーセントを示したこれらの地図では、こうした傾向はやや弱いものである。ここでは、「標準語」の地図と同様に、各インフォーマント集団のパーセントの数値を偏差値に換算し、その偏差値を地図化することによって、その地方の話者が抱いている言語意識の特徴を見出そうとした。

「感じのいい」ことばの認知領域の偏差値地図(図16~30の偶数)では、それぞれの地方の話者が地元のことばをいかに好意的に感じているかがはっきりしてくる。上で見た8枚のパーセントの地図(図15~29の奇数)では、インフォーマントが関西の領域と関東の領域をあげる傾向が共通して見られた。結果的には、偏差値の地図は、一般的な傾向(関西と関東を指摘すること)を取り除いて、その下に隠されていたそれぞれの地方の言語意識の独自性を見えるようにする手段である。

最後に、標準偏差の地図では、東北地方(そして、ある程度東京と大阪)のことばに対する評価がインフォーマント集団によって大きく異なっていることが分る(図32)。

図3 Kanto inf "Standard" (n=26)

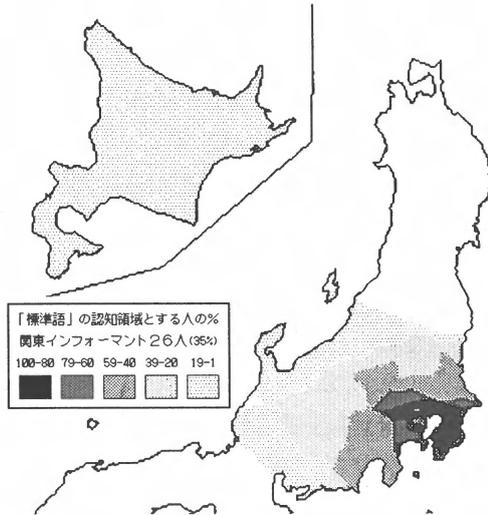


図4 Aichi inf "Standard" (n=29)

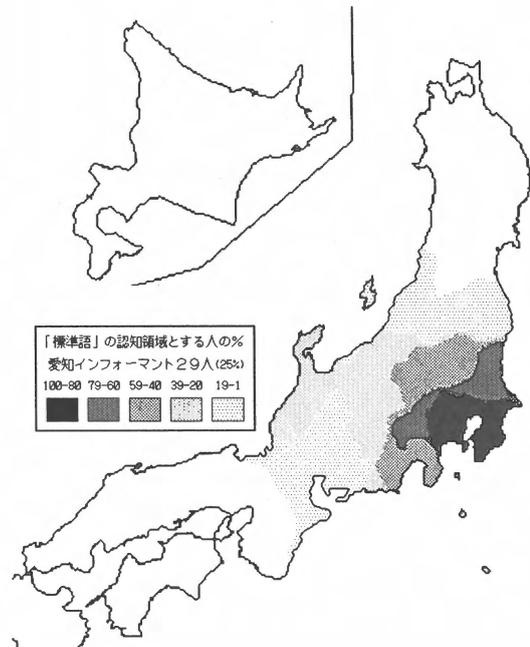


図5 Gifu inf "Standard" (n=15)

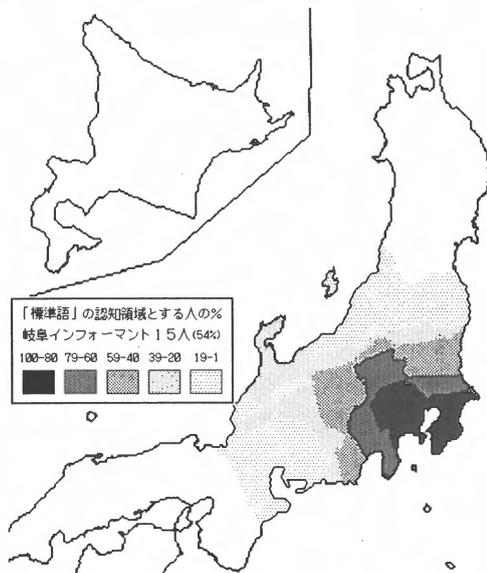


図6 Kanazawa inf "Standard" (n=24)

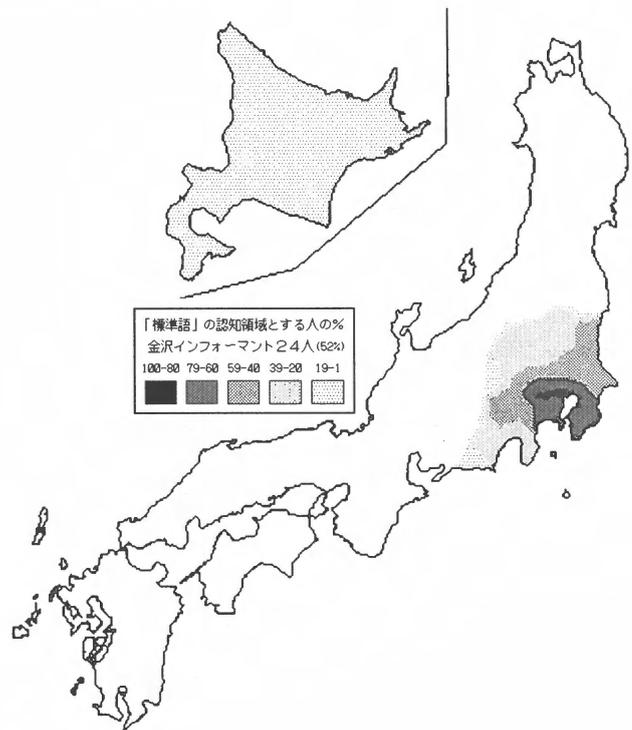


図7 Kansai inf "Standard" (n=74)

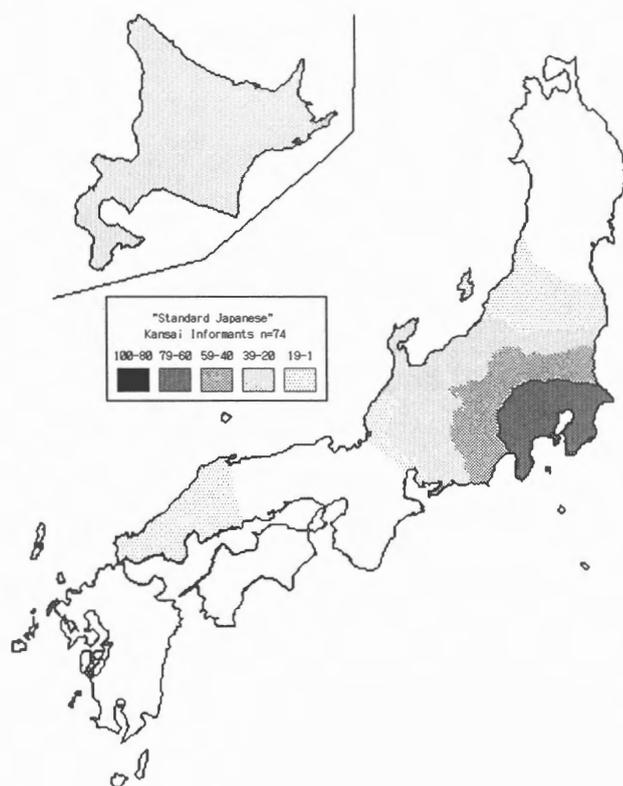


図8 Hiroshima inf "Standard" (n=12)

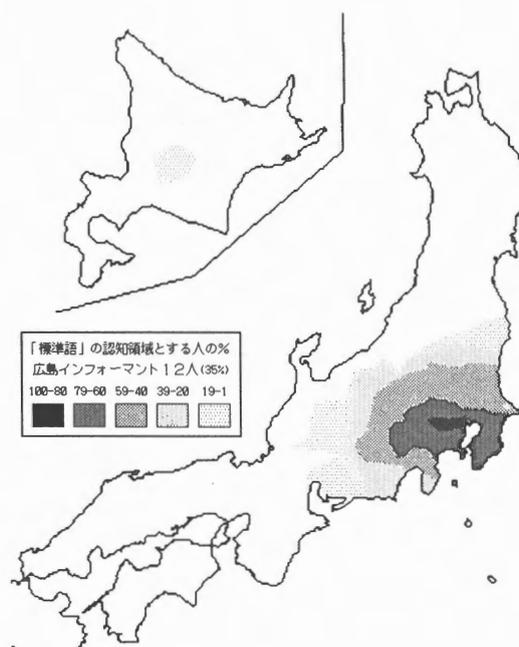


図9 Fukuoka inf "Standard" (n=30)

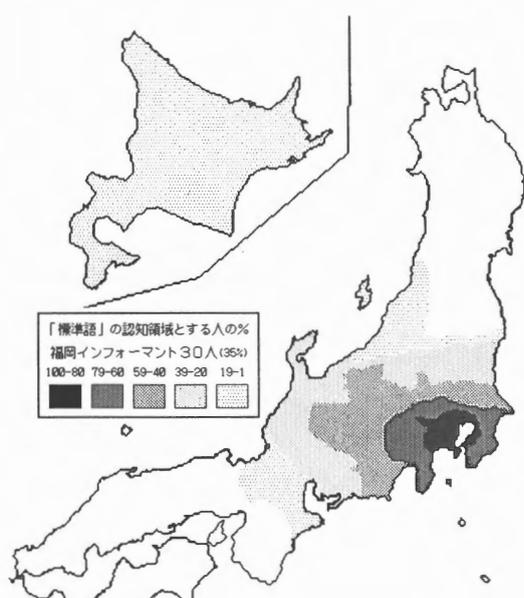


図10 Kagoshima inf "Standard" (n=72)

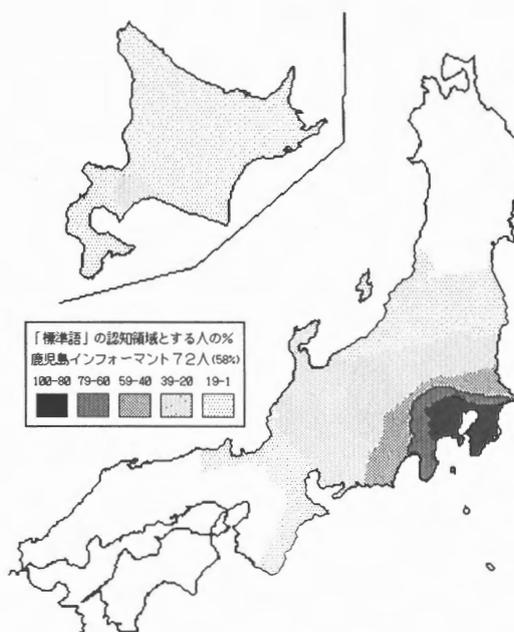


図11 Kansai-Fukuoka "Standard"

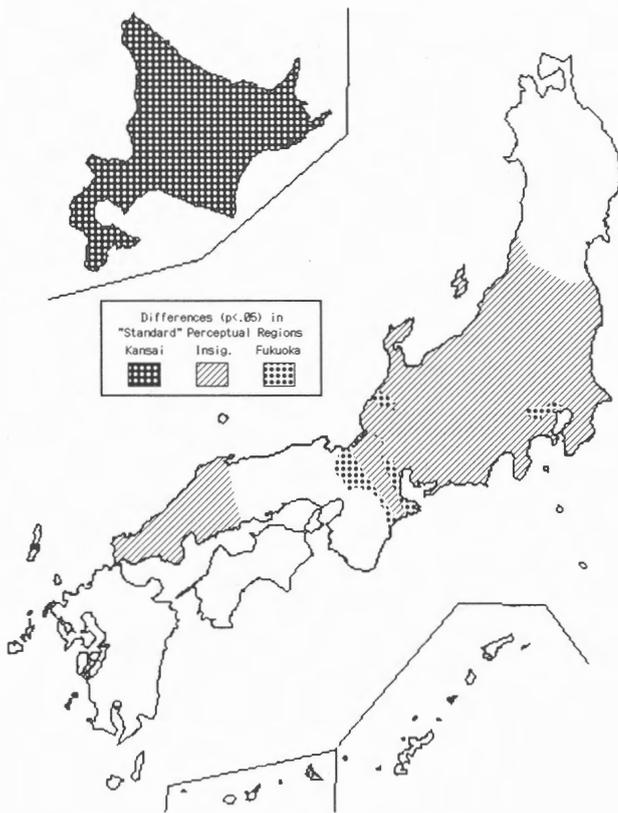


図12 Eight Region Averages "Standard"

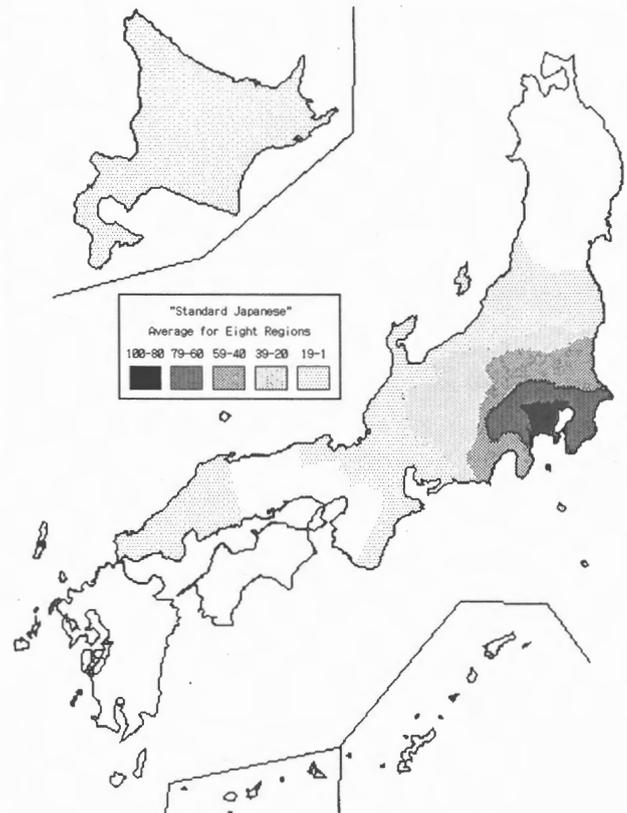


図13 Kansai "Standard" (stand.)

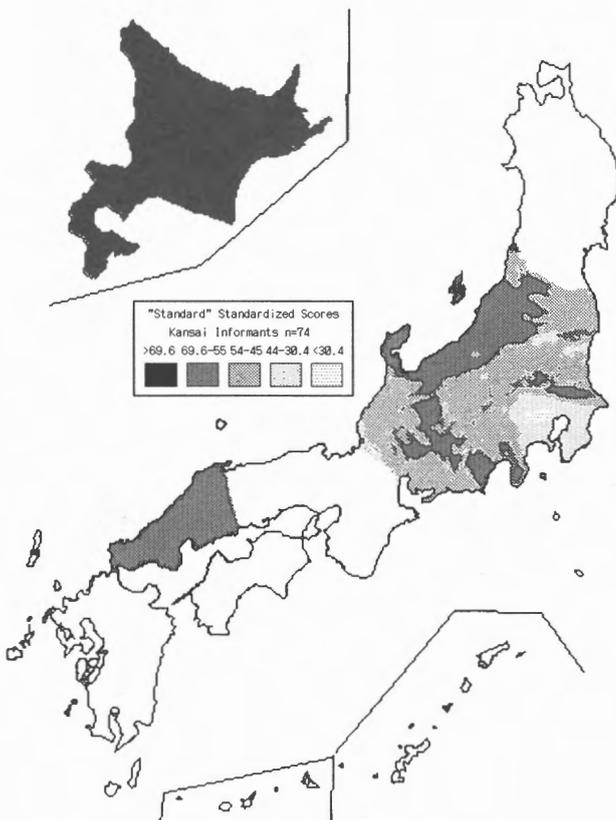


図14 Standard Deviations "Standard"

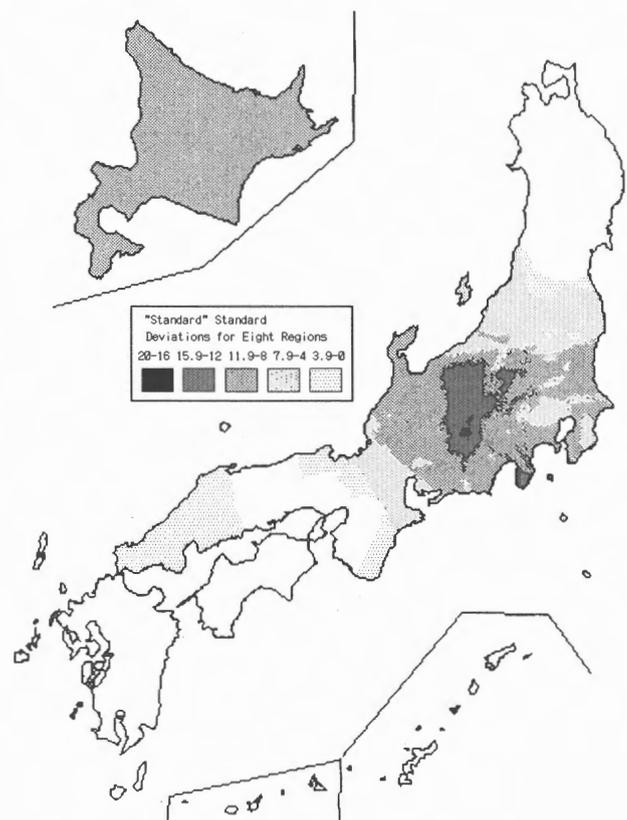


図15 Kanto inf "Most Pleasant" (n=57)

図16 Kanto inf "Most Pleasant" (stand.)

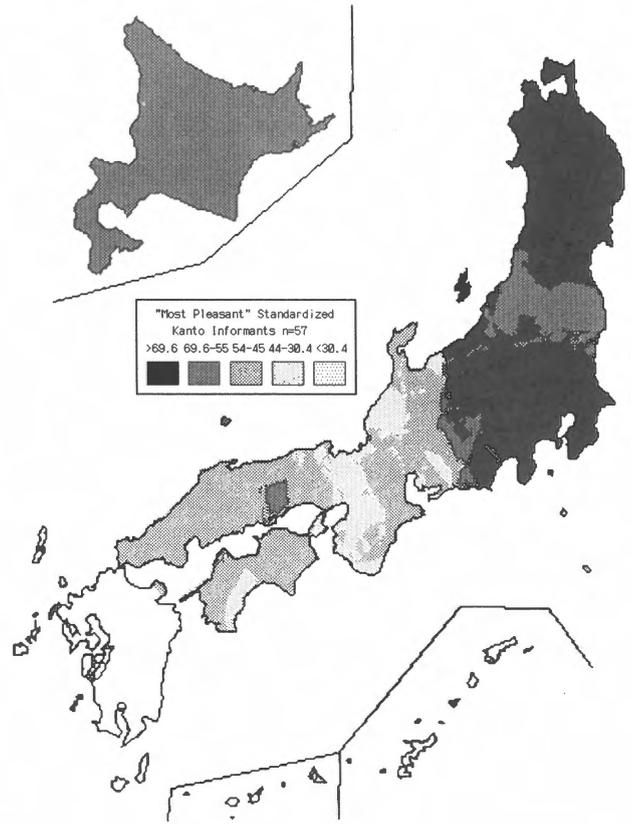


図17 Aichi inf "Most Pleasant" (n=36)

図18 Aichi inf "Most Pleasant" (stand.)

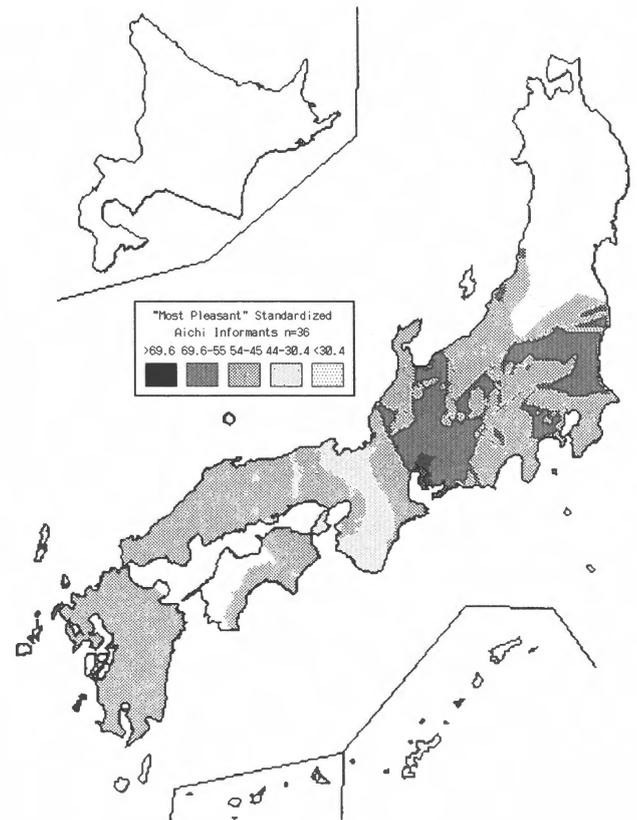
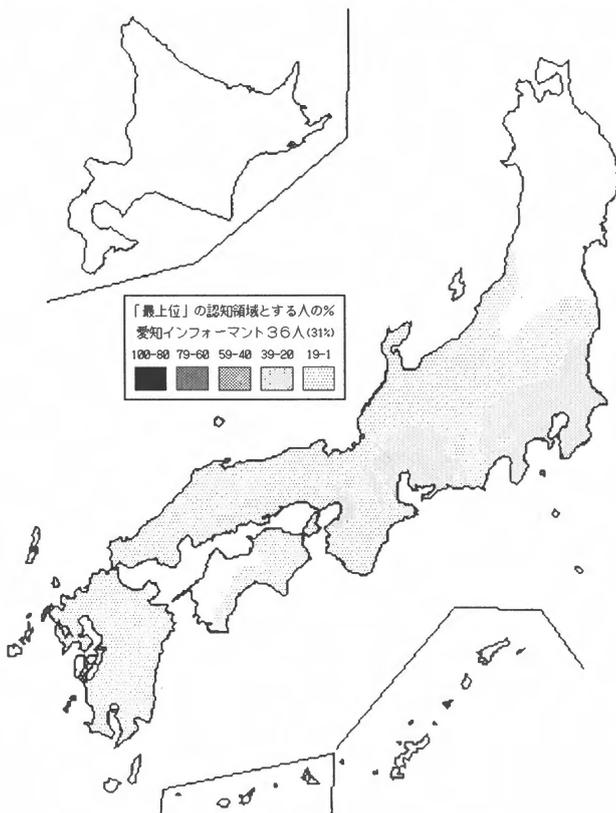


図19 Gifu inf "Most Pleasant" (n=19)

図20 Gifu inf "Most Pleasant" (stand.)

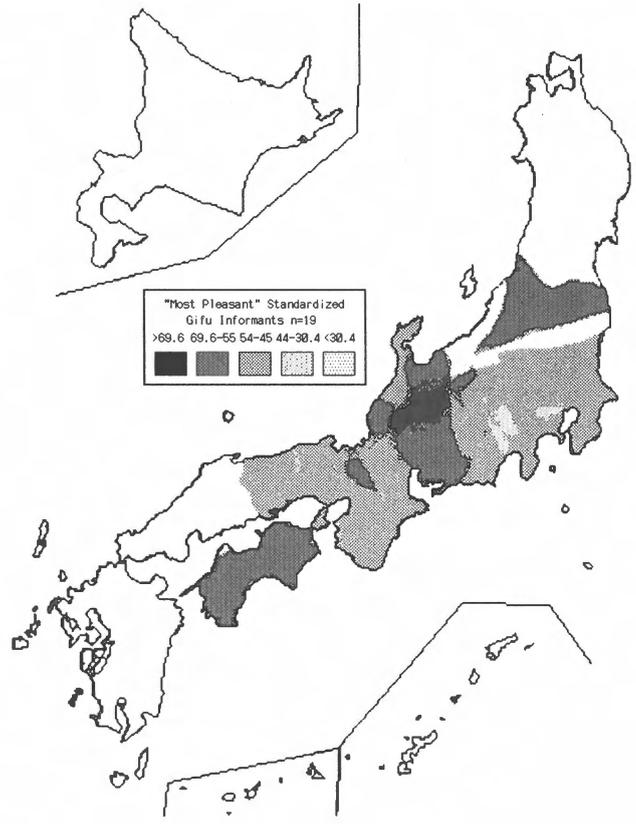
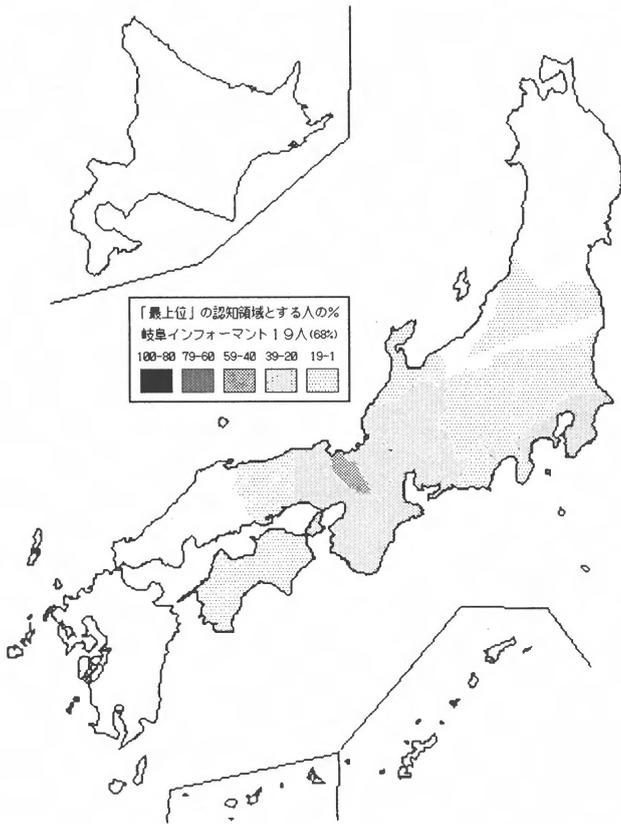


図21 Kanazawa inf "Most Pleas." (n=31)

図22 Kanazawa inf "Most Pleas." (stand.)

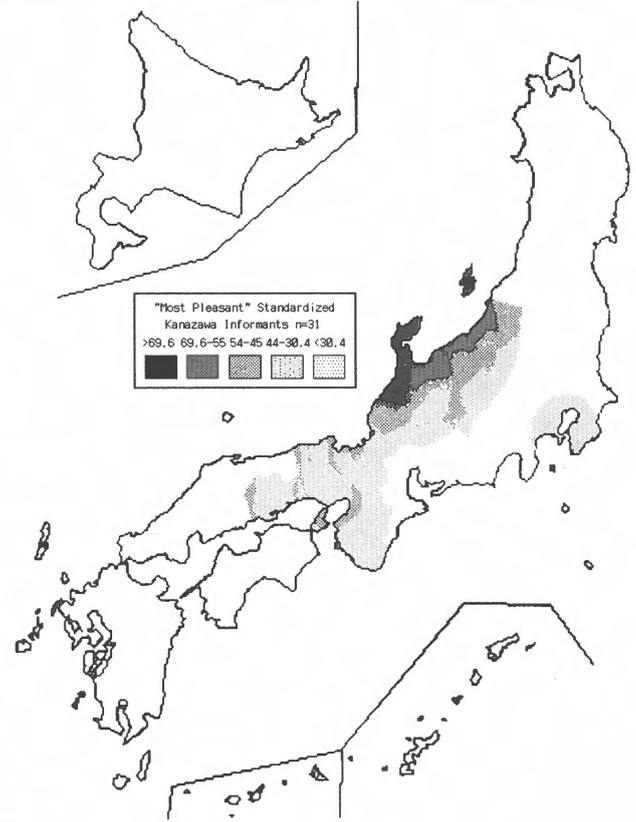
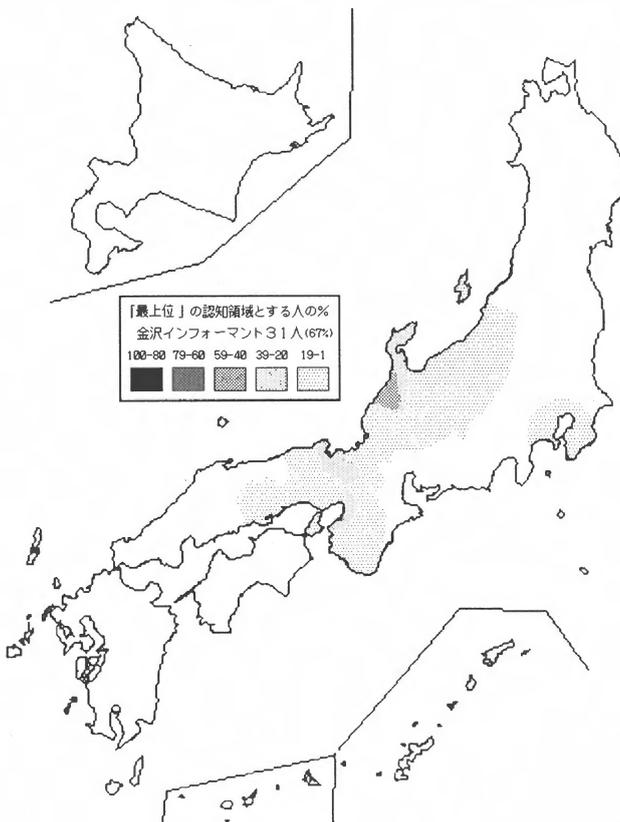


図23 Kansai inf "Most Pleas." (n=169)

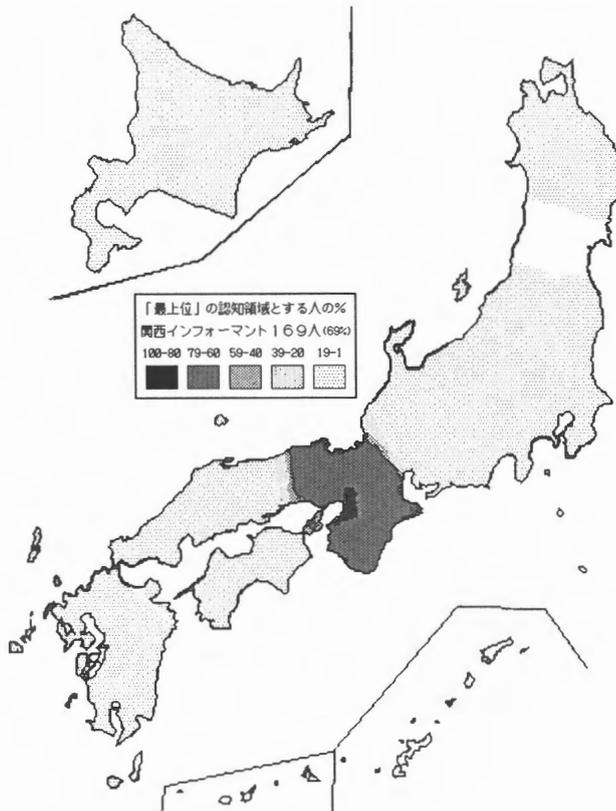


図24 Kansai inf "Most Pleas." (stand.)

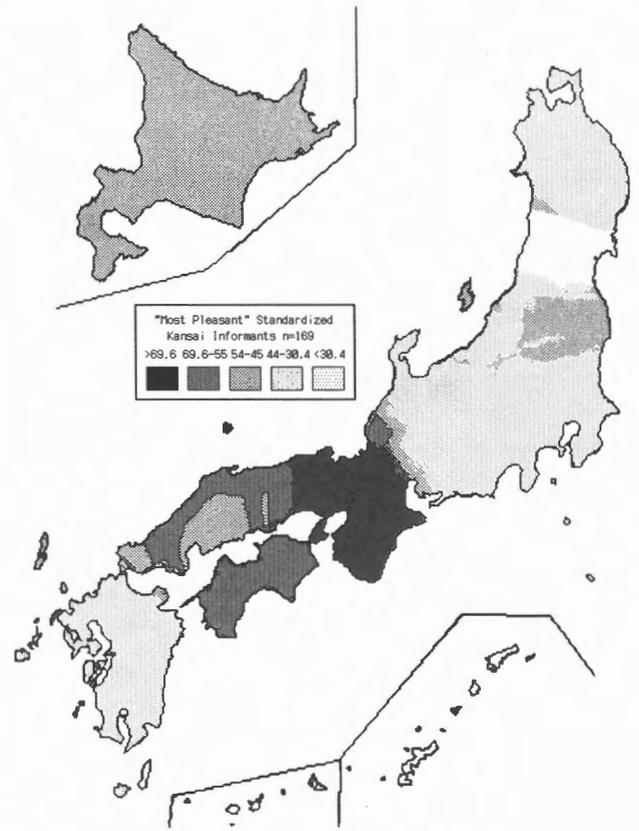


図25 Hiroshima inf "Most Pleas." (n=26)

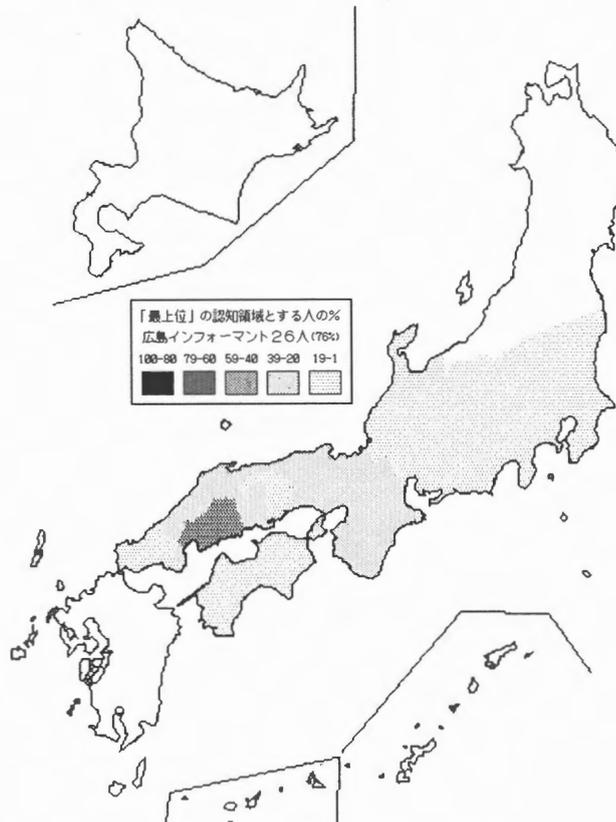


図26 Hiroshima inf "Most Pleas." (stand.)

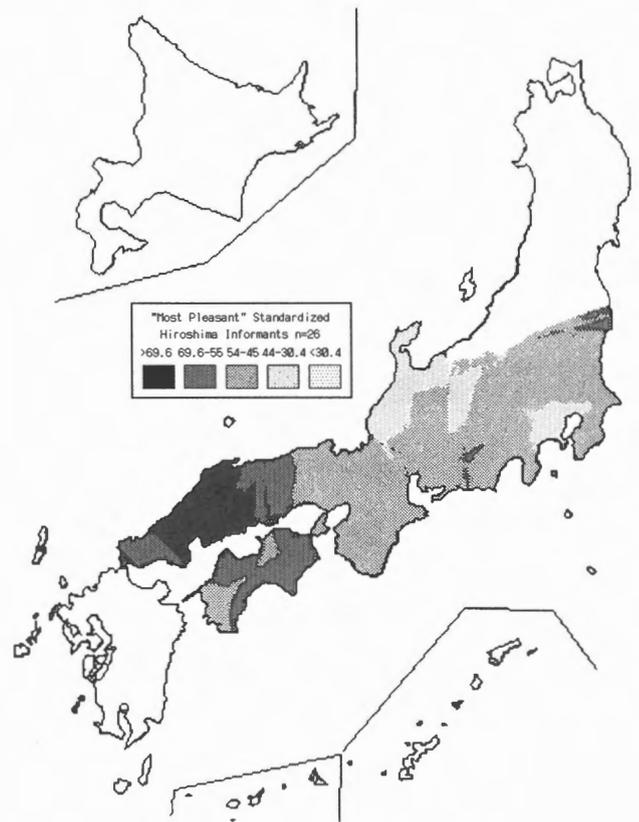


図27 Fukuoka inf "Most Pleasant" (n=56)

図28 Fukuoka inf "Most Pleasant" (stand.)

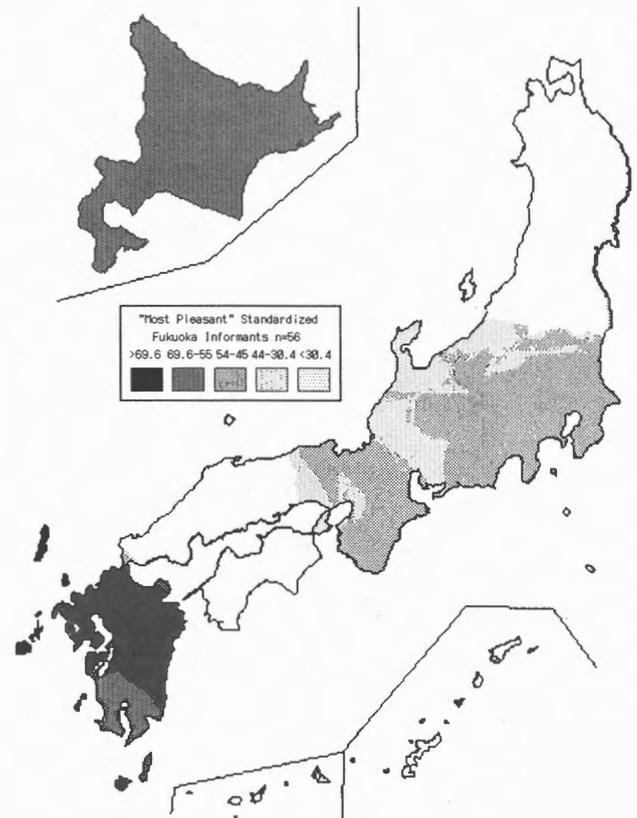
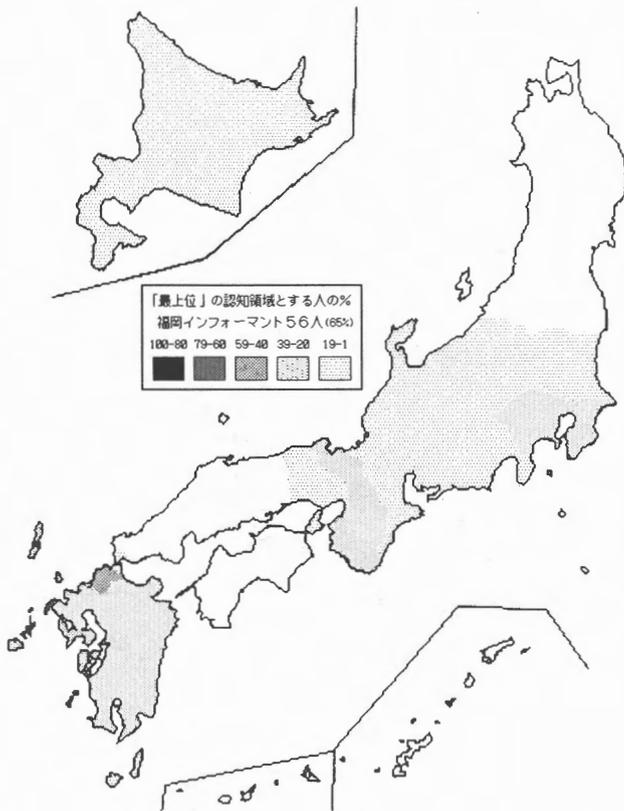


図29 Kagoshima inf "Most Pleas." (n=96)

図30 Kagoshima inf "Most Pleas." (stand.)

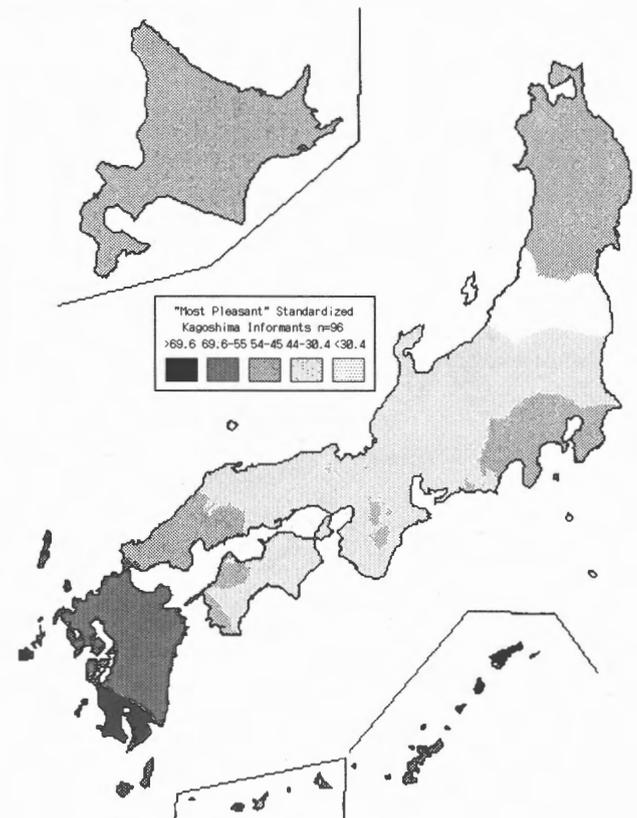
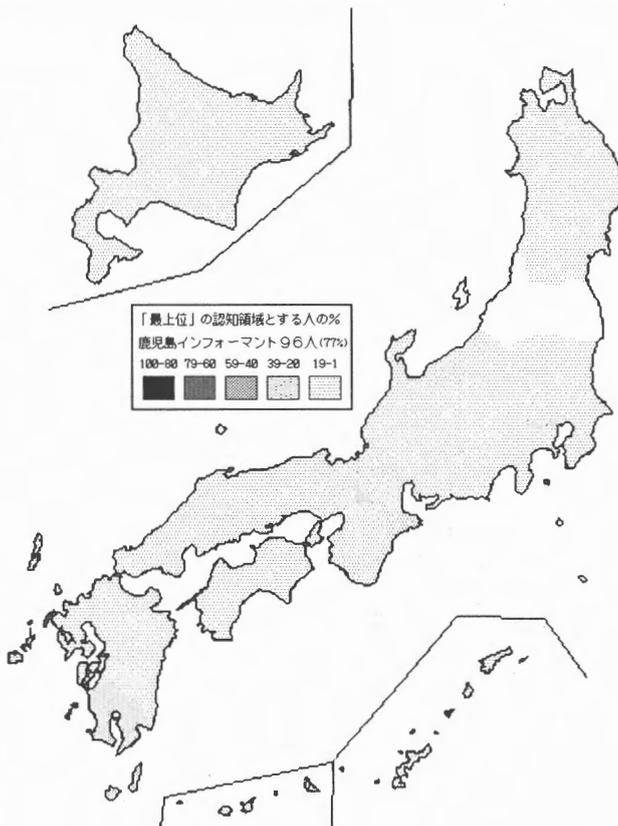


図31 Eight Region Aver. "Most Pleas."

図32 Standard Dev. "Most Pleasant"

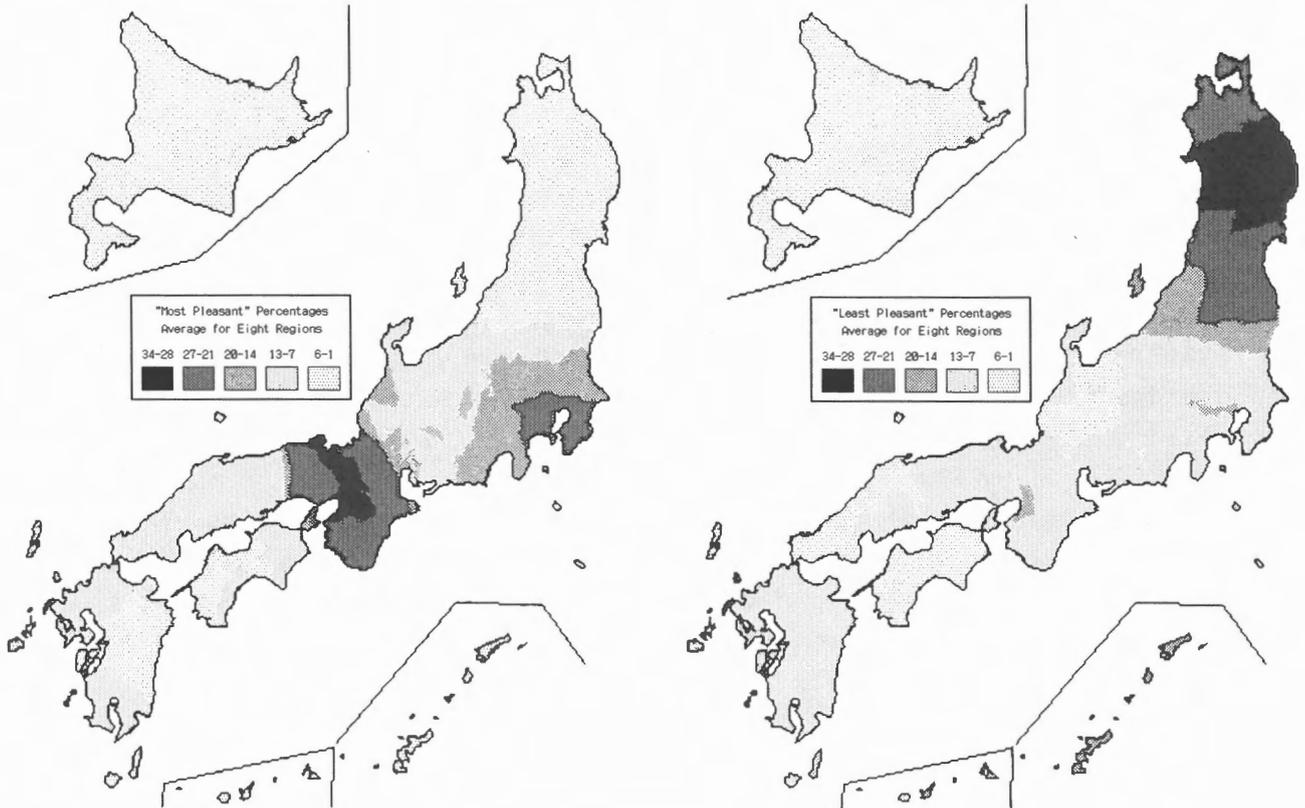


表1 言語変種名

言語変種名 全員=811人	被調査者集団 の平均	関東	愛知	岐阜	金沢	関西	広島	福岡	鹿児島	中・高年	出現 数
1 東北弁	81.6	89.3	82.2	89.3	76.1	81.6	79.4	77.9	89.6	69.1	667
2 関西弁	76.6	81.3	69.5	82.1	58.7	79.5	97.1	74.4	81.6	65.5	622
3 九州弁	49.4	72.0	42.4	57.1	52.2	66.0	41.2	46.5	23.2	43.6	412
4 名古屋弁	46.3	41.3	70.3	75.0	67.4	37.7	44.1	14.0	41.6	25.5	351
5 標準語	34.5	33.3	22.9	53.6	47.8	29.5	38.2	20.9	56.8	7.3	267
6 沖縄弁・語	32.9	60.0	19.5	14.3	41.3	26.6	41.2	39.5	37.6	16.4	260
7 広島弁	32.2	16.0	22.9	50.0	34.8	19.7	82.4	19.8	35.2	9.1	211
8 博多弁	29.5	20.0	21.2	28.6	37.0	16.0	41.2	38.4	63.2		231
9 鹿児島弁	25.7	21.3	12.7	10.7	23.9	5.7	26.5	30.2	85.6	14.5	209
10 京都弁	25.3	29.3	18.6	32.1	39.1	13.1	29.4	12.8	33.6	20.0	177
11 関東弁	23.5	29.3	9.3	17.9	13.0	52.0	17.6	11.6	9.6	50.9	227
12 大阪弁	22.7	29.3	22.9	17.9	37.0	18.0	8.8	8.1	35.2	27.3	184
13 北海道弁	21.7	57.3	12.7	17.9	34.8	12.7		23.3	20.0	16.4	164
14 東京弁	20.8	28.0	22.9	10.7	23.9	16.8	41.2	17.4	19.2	7.3	160
15 四国弁	20.2	29.3	10.2	17.9	21.7	19.7	17.6	19.8	27.2	18.2	164

## 関連文献

- Grootaers, Willem (1959) "Origin and nature of the subjective boundaries of dialects" *Orbis* 8:355-84.
- Grootaers, Willem (1963) "Les Premiers pas à la recherche des unités dialectales" *Orbis* 12:361-80.
- Grootaers, Willem (1964) "La discussion autour des frontières dialectales" *Orbis* 13:380-398.
- Long, Daniel (1992) "The Role of Linguistic Features in Perceptual Dialect Regions" *Proceedings of the XVth International Congress of Linguists*:371-374. Les Presses de L'Université Laval.
- Long, Daniel (1996a) "Perceptions of Regional Variation in Japanese" paper presented at ALLA, University of Jyväskylä, Finland.
- Long, Daniel (1996b) "The Perception of "Standard" as the Speech Variety of a Specific Region: Computer-Produced Composite Maps of Perceptual Dialect Regions" paper presented at Methods IX, University of Wales.
- Long, Daniel (印刷中a) "Mapping Non-Linguists' Evaluations of Japanese Language Variation" *A Handbook of Perceptual Dialectology*. Sage Publications.
- Long, Daniel (印刷中b) "Drawing and Reading Perceptual Dialect Maps" *A Handbook of Perceptual Dialectology*. Sage Publications.
- Long, Daniel, 訳 (印刷中c) "Consciousness of Dialect Boundaries (柴田武 著)" *A Handbook of Perceptual Dialectology*. Sage Publications.
- Long, Daniel, 訳 (印刷中d) "Consciousness of Linguistic Boundaries and Actual Linguistic Boundaries (野元菊男 著)" *A Handbook of Perceptual Dialectology*. Sage Publications.
- Long, Daniel, 訳 (印刷中e) "On Dialect Consciousness: Dialect Characteristics Given by Speakers (馬瀬良雄 著)" *A Handbook of Perceptual Dialectology*. Sage Publications.
- Long, Daniel (1997 予定) "Who decides which isoglosses are dialect boundaries?" Paper to be presented at Special Session on Dialect Boundaries, American Dialect Society Annual Meeting, Chicago
- Preston, Dennis R. (1988a) "Methods in the Study of Dialect Perceptions" *Methods in Dialectology*:373-395. *Multilingual Matters*.
- Preston, Dennis R. (1988b) "Change in the Perception of Language Varieties" *Historical Dialectology* (J. Fisiak, ed):475-504. Mouton de Gruyter.
- Preston, Dennis R. (1988c) "Sociolinguistic Commonplaces in Variety Perception" *Linguistic Change and Contact* (NWAV-XVI:Texas Linguistic Forum 30):279-92. Department of Linguistics, University of Texas.
- Preston, Dennis R. (1989) *Perceptual Dialectology: Nonlinguists Views of Areal Linguistics*. Foris.
- 柴田 武 (1959) 「方言境界の意識」『言語研究 36』
- 馬瀬 良雄 (1964) 「方言意識と方言区画」『日本の方言区画』東京堂
- ロング・ダニエル (1990) 「方言認知地図の書き方と読み方」『日本方言研究会 第50回 研究発表会 発表原稿集』日本方言研究会
- ロング・ダニエル (1991) 「近畿地方における方言領域の認知 —「方言認知地図」を用いた分析—」『人文地理学会大会研究発表要旨』人文地理学会
- ロング, ダニエル (1994) 「方言認知地図のデータ処理プログラム」第4回西日本国語国文学データベース研究会にて口頭発表 (於大阪樟蔭女子大学)
- ロング, ダニエル (1995) 『パソコン国語国文学』「方言認知地図」執筆担当 157-171頁 (啓文社)
- ロング, ダニエル (1996a) 「『感じのいいことば』の領域 —8地方の方言認知地図を比較して—」大阪大学日本学科言語系同窓会にて口頭発表
- ロング, ダニエル (1996b) 「方言認知地図にみられる話者のアイデンティティ —日本とアメリカの場合—」国立民族博物館共同研究会にて口頭発表